



第400回 6/7(火)

「グロリアのスペイン語」

代表 グロリア・ロブレス・ベラスケスさん

会員 大西 真さん、下田 栄治さん



大和市在住のグロリアさんはペルー出身でスペイン語の教師をしています。スペイン、中南米諸国のスペイン語の文化を学びたい方を対象に2021年10月に「グロリアのスペイン語」を発足。授業の様子は会員の大西さんと下田さんが「明るいグロリア先生のお陰でとても楽しいクラスです!」口を揃えるほど好評です。秋からは、より勉強にフォーカスした新しいクラス「グロリアのスペイン語 A1」を開始する予定です。

次の出演

402回 7/5(火)「やまと国際フレンドクラブ」

403回 7/19(火)「日本ケアトラソリン普及協会」

問合せ: 090-6479-1552

(グロリアさん)

FM やまと 77.7MHz 第1.3.5(火) 生放送 9:00 ~ 10:00 同日再放送 15:00~

第401回 6/21(火)

「親業勉強会」代表 吉岡 雅子さん



親子の関係を「より心温まるもの」にする為のメソッドである親業はアメリカの臨床心理学者トマス・ゴードン博士が始めたプログラムです。吉岡さんは2018年11月「親業勉強会」を発足し、親業インストラクターとして親業の説明会、勉強会を開催し活動しています。これまで開催した会では親業のレクチャーと共に実践報告が行われ、メソッドが身につくようなプログラムが組まれているとのこと。親子関係に限らずあらゆる人間関係に応用できるので多くの方々に説明会に参加して欲しいと語りました。

親業説明会は市民活動拠点ベテルギウスにて開催されています。詳しいお問合せは

minorusuguru@gmail.com (吉岡さん)

TSUBASA's トーク 第9回「物語の中にいるみたい」

① 軌道に乗ってきた活動 印象に残っているのは

「緑のふるさと協力隊」の活動は3ヶ月目に入り、岩手県一関市花泉町での生活も軌道に乗ってきました。忙しかった田植えもやっと一段落。また、誕生日を地域の方々に祝ってもらったり、初めて出会った方々から「市の広報で見た」「SNS を見ている」と言われることが増えてきたりもしています。

4-5月の活動の中で印象に残っているのは、「物語の中にいるみたい」と感じるような、予想もしていなかった人たちや風景との出会いです。



誕生日を祝ってもらう

② 広い田んぼを友人と語り合い歩く

花泉町では米を大規模に生産しているので、田んぼも見渡す限り広がっています。6月上旬に去年協力隊として別地域で活動した2人が来てくれた時には、そうした田んぼ道と一緒に雑談しながら散歩しました。



広い田んぼを語り歩く

それまで2人とはあまり話したことがなかったのですが、田んぼ道を散歩しながらであれば緊張せず自然と言葉も出てきました。こうした僕自身が、協力隊を始めなければ出会わなかった2人と広い田園風景にいたことが印象的でした。

③ 植樹祭 山々に響く地域の言葉と外国語

同じ一関市の室根村で、6月上旬に「森は海の恋人植樹祭」が2年振りに開かれました。「気仙沼の牡蠣などの漁業は、川の上流の室根の山々に支えられている」という考えのもと、

30年以上続いているお祭りです。去年の協力隊員の紹介で僕も植樹祭に参加しました。驚いたのは、オープニングの時に舞台上で地域の方々だけでなく、京都やアメリカの大学教授もお祝いのメッセージや植樹の意義について話していた



植樹祭の餅まき



室根の山で植樹

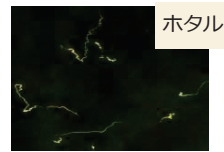
ことでした。スピーカーを通して聞こえる自分とはイントネーションの違う地域の言葉や英語が、普段は静かな山と田んぼの遠くの方まで響いているようで、地域の隠れた活気を見た気がしました。

③ ホタルの時期 自分も「物語」を作っていきたい

6月の下旬になり、花泉町の家近くではゲンジボタルが飛び始めました。自分の祖父母と年齢に近い近所の方に、その東京の友人との夕食に呼ばれ、そのまま一緒にホタルを見にいったことがありました。

杉林に隣接する小さな水路に10匹以上ホタルが飛んでいて、その何匹かが杉の横を上り、満天の星々と重なったのを一緒に見た時、「物語の中にいるみたい」と思いました。

協力隊員が生活に慣れ始めると、活動を自分で組む割合が増えてきます。そうした時に、僕は都市で生活する人たちを花泉町に呼び、地域の生活を体験するイベントを開いてみたいです。色々な学びの期待もありますが、こうした「物語の中にいる」感覚を味わってもらい、思い出を作りたいと思っています。(サポーター 尾畑 翼)



ホタル

大和市民活動センターは「大和市新しい公共を創造する市民活動推進条例」に基づいて設置されています。

「あの手 この手」 第180号 発行日: 2022年7月10日

大和市民活動センター <開館日 月~土 9:00~18:00>

<休館日 12月29日~1月3日・毎月第3月曜日>

〒242-0018 大和市深見西1-2-17

発行: 大和市民活動センター 拠点やまと

TEL: 046-260-2586 FAX: 046-205-5788

e-mail: yamato@ar.wakwak.com

http://www.kyodounokiyoten.com/

あの手この手で考えて、あの手この手で問題解決!

# あの手 この手

あの手この手のマークの間のSIは solution(解決)のSです。

第180号 2022年7月10日 大和市民活動センター【拠点やまと】発行

1月号  
2022



ベテルギウス玄関  
7月1日の生け花



表紙絵は「やまと国際フレンドクラブ」主催  
2021「第14回やまと国際アートフェスタ」

入賞作品を掲載しています。

今回のテーマは ~ 笑顔のために ~

アトリエみち賞

アントニオ リアム アイデン さん

南林間小学校(4年) 現在5年《フィリピン》

タイトル:「ゆめにむかって 決めろ〜 ダンクシュート」

メッセージ:「バスケットボールが好きで ダンクシュートした時の  
絵を描きました。したがきの絵をがんばりました。」

「やまと国際アートフェスタ」は  
「やまと国際フレンドクラブ」(IFC) \*の主催で  
毎年催されています。

\*草の根の国際交流、外国人支援を行いながら  
「ともにくらすまち 大和」を考えるボランティアグループです。

大和市民活動センター 第99回 共育(ともいく)セミナー

7月23日(土) 14~16時 会場参加 8名定員及び ZOOM 参加

ウィズコロナ、ポストコロナ時代の社会貢献活動 その3

「福祉施設におけるアート活動の実践」と「その実践が社会と出会うということ」



\*詳細は、ホームページをご覧ください。



ウイズコロナ、ポストコロナの時代  
市民活動、NPO活動、社会貢献活動は  
どうあるべきか 先駆の人を訪ねて 第7回  
福祉施設でアート活動をするということ  
②仕事になったアート活動を企業と行政をエンロールして行う !!

中津川浩章（なかつがわ ひろあき）さん  
認定 NPO 法人アール・ド・ヴィーヴル/障害福祉サービス事業所アール・ド・ヴィーヴル（生活介護・就労継続支援 B 型） アートディレクター・理事

シリーズ第7回は、前号に引き続き、中津川浩章さんへのインタビューを掲載します。

前号では、中津川さんが障がいがある人のアートと出会われた経緯、福祉施設で、アートを仕事とする仕組みを作られることにご尽力され、そのご経験から、小田原に自ら理事を務められるアート活動を仕事にでき、作品も展示できるカフェを併設した福祉施設を立ち上げ、運営されているお話をご紹介しました。今号では、障がいがある人の適性、特性に合わせた働き方や、企業や行政との連携のあり方、障がい者アート・アールブリュットの現在の状況などについてお伺いしました。

聞き手は、望月則男、船越英一 2022 年 4 月 14 日

― 施設にいる障害がある人が就労して得る給与は、どのようになっているのですか。

一般の人の給与にあたるものは、工賃という形で支払われますが、返品があったりした場合は工賃にならないんです

厚生労働省は、障がいがある人の賃金を上げる「工賃倍増 5 か年計画」を立てて、工賃を上げるような仕事をなささいと言っています。実際に、工賃プラス障害年金では暮らしていけないので、皆さん悩んでいます。グループホームに入るにしても経済的には大変です。工賃をあげていくことは、すごく重要な取り組みです。施設には、就労継続支援 A 型と\*1 B 型がありますが、成功しているところでは、8 万円から 10 万円の給料を支払っている施設もあります。有名なところでは、千葉県で豚を育てて、肉やハムを販売している会社や、横浜でチョコレート<sup>ちちゅうりょん</sup>の製造行っているところなどがあります。障がいがあるお子さんの給料を見て愕然とした親がて、「これでは生活できない。だったら私が起業しよう」と言っ



アール・ド・ヴィーヴルの建物外の自販機、アートしてるし、売り上げが寄付される仕組みもついている

― やっぱ、自分ごととして起業する人がいないと結構厳しいんですね

そうなんです。工場の孫請けだけでは暮らせない。意志ある企業の参入で、流れは変わってきました

これまでの福祉では、本当に工場の孫請けだから、いくら頑張っても大したお金にはなりません。1 日 300 円とか、それで暮らせるはずはない。

\*1 障害がある人が一般企業への就職が不安、あるいは困難な場合に、雇用契約を結ばないで軽作業などの就労訓練をおこなうことが可能な福祉サービスのことを言う



流しの壁面に貼られたタイル絵



中津川浩章さん  
カフェ「art de vivre」にて

それではいけないと、企業体として施設経営を行う形で、給料を出すようになってきました。昔だったら福祉に参入しない企業が入ってきて、新しい仕事をするというふうにはなっています。アート活動をする企業がお金を出すということも最近ではありますから。

それぐらい、障がいがある人の仕事や工賃をめぐる価値観は変わって来たといえます。

障がいがある人のアート作品を企業の社内報やシンボルマークに使い、その対価として報酬を支払う企業もあるし、障がいがあるアーティストと雇用契約を結んで給料を支払うという IT 企業も出てきています。

そういう意味では働き方もすごく変わって来ています。僕らが 30 年ぐらいずっと地道に活動してきた成果がようやく出てきているという感じです。

― でも、そういう企業の参入や思いがある人がいないと取り組むのは難しいという現実がありますか

今までは、障がいがある人の適性にあった働き方をなかなか、提案できなかったんです

それこそ、ボールペンの組み立てのような仕事しかなかった。ですが今は、たとえば胡蝶蘭の栽培だったら、自閉症の人は決まった時間に水をやるとか、温度調節をきちんとやるとか、そういうことはできるわけです。と言うより、一般の人よりも、厳密にできて、優れています。絵を描くのもそうだし、チョコレートを作るのもそうだし、すごく時間はかかっても、厳密に材料をちゃんと計量してやるとか、こうした障がい特性に応じて、それを生かした働き方を提案できるようになってきました。

アート活動は確かに障がいがある人のいろんな特性に合っているところがあって、どんどん広がって来ています。自閉症の人だったら感覚過敏という特性がよくあります。聴覚過敏、触覚過敏とかね。それが、色や形に対する感受性に反映されて、魅力的な絵が描けるんです。「アール・ド・ヴィーヴル」に來ている人も、みんな美術を勉強した人じゃないんです。みんなここへ来て、初めて絵を描いている人たちなんです。



乾燥棚の作品を見せていただいた

― 施設にカフェ「art de vivre」を作った理由は何ですか  
社会の人と交流の場を作らなくちゃいけない

カフェを作ったのは、交流の場所をちゃんと作らなきゃいけないと思ったからです。一般の福祉施設って、社会とかなり分断されてるんですね。コロナになってからは、一層そうなっています。なので、誰でも気軽にコーヒーを飲んだり、障がいがある人たちがそこで働いて、僕がお茶飲んでいたら、みんな絵を見せに来るという場を作りたいかったです。

絵について僕は基本的に「教える」ことはしないので、みんな自分の好き勝手にやっています。好き勝手にできる環境を作るのがすごく大切です。逆に人の言うことを聞いてばかりいても、良い作品にはならない。自分で好きなようにできる人がいいんです。



この可愛いお皿も、施設に通う人がつくっている

― 自分を解放できたり、自由度があるので、描く方もうれいでしょうね

そうなんです。障がいがある人の特性も活かせて、企業も障がいがある人たちとコミュニケーションをとる方法を体感できます

今、企業に作品のリースをしています。企業の雰囲気ガラッと変わります。3 ヶ月に一度すべての作品を交換しているんですけど、かけ替え時には作家本人や障がいがある利用者本人が企業に出向くんです。そこで、障がいがある人と初めての交流が生まれて、社員の意識が変わってくる。障がいがある人を雇用したいという企業や福祉施設で、「社員研修」をすることで、障がいがある人たちとのコミュニケーションを体感し、それを企業に持ち帰ることで、障がいがある人の雇用を積極的に始めたということもあります。障害がある人の特性を理解してもらえたよい事例と言えます。



カフェの壁面いっぱい展示された作品

利用者の作品は、小田原市内の蒲鉾メーカ<sup>ちちゅうりょん</sup>の社員食堂や横浜市にある銀行の本店、今は県庁や、県知事室にも展示されています。

― カフェに飾られている作品を見ると立体感というか、額の厚みというか、ほかではみれない展示の仕方ですね

そうです。展示方法を工夫しています

昔だったら、障がいがある人の展覧会って、額がみんなバラバラで、斜めになっていても誰も気にしない感じだった。それが、「エイブル・アート・ジャパン」が活動し始めたころ、ある方が言ったのは、「現代アートのように展示しよう。見るべき価値のある、なにか大切なものがそこにあるとわかるように。作品をしっかりと見てもらえるように」ということでした。30 年ぐらい前の話ですが、僕らが呼ばれて、そのような展示の仕方<sup>ちちゅうりょん</sup>で展覧会を開きました。そうしたらもう、本当に作品を見る人の目<sup>ちちゅうりょん</sup>ががらっと変わりました。

― 最後に、障がいがある人のアート活動と今後の行政、企業との関係のあり方についてお話しください

エンロールして行こうよ、行政も企業もいっしょにやろうよってことです



ともいきアートに出品されていた作品

僕たちは、現実的には企業、行政と一緒にやらないと社会課題にも到達できないので、「自己満足的に絵画活動をやっている作品ができたよね」で終わったら意味がないんです。

社会に投げかけて、その価値がフィードバックされて広がっていくことが大切です。昔の障がいがある人の活動はどちらかというと対立軸を作るというか、差別に対して糾弾して行くという運動がずっと主だったんですが、今はエンロールしていくというか、行政も企業も一緒にやろうよというふうに変わってきました。対立軸を作って変革しようとするのは限界だったんですよ。

それよりも行政とも企業とも連携できるところは連携して、お互いにコミュニケーションをとっていくと、分かり合えるところがどんどん増えてくる。そうすると変化していく。最初から正しいと思うことだけを主張していたら、結局相手は、逃げてしまっていた。一緒にやることで企業や行政の意識も変わっていくことを体感して、活動の仕方が少しづつ変わってきました。

障がい者アート、アールブリュットの作品のおもしろさや価値に気づく人が増えている。

日本の現代アートは、エリート教育から生まれている現実があります。中学生ぐらいからデッサン教室に通って、高校に入学して、研究所に通って芸大に入る。その後、海外留学をして作品を作って、ステップアップして行く。

そういう人たちによって、アートは生み出されている一方で、既存の美術や教育、障がいの有無や社会の枠組みをこえて、独自の世界を創造し続けている人たちがいて、同じぐらいに、いやそれ以上におもしろい作品がいっぱい生まれていることも事実です。

2020 年に開催された「あるがままのアート 一人知れず表現し続ける者たち」展では多様性あふれる魅力的な作品がおおぜいの来場者を集めました。時代は変わってきています。

障がいがある人やアートやアールブリュットの作品のおもしろさ、価値に気づく。自分に足りないものがここにある、おもしろいと思う。既成概念が変化していく、時代のダイナミズムを感じます。



カフェ「art de vivre」

編集・文責・写真：船越英一